田中滋・寺田憲弘　編
『聖地・熊野と世界遺産―宗教・観光・国土開発の社会学―』
晃洋書房　2021年3月　340頁　3,200円＋税

まず「はじめに」で，本書の各章の位置付けについて，概括的に紹介が行われる。続く序章「聖地・熊野の世界遺産化を読み解く」では，副題に記されているように，ナショナリゼーション論からのアプローチとなっている。このアプローチは日本の近代国家形成と神道国教化について，近世西欧の宗派化と比較しつつ，明治維新後の近代化とナショナリゼーションの相互関係を問いながら，位置づけるものである。

本書によれば，ナショナリゼーションとは国民の均質化や全国規模化，国内地域分業化，階層・階級分化などを含んだ包括的概念であるという。西欧では宗派化が先行したのが，日本ではナショナリゼーションと神道国教化が同時進行したことが特異であり，信教の自由を西欧から批判されることになったとする。

熊野は地域分業化の中で，林業や電源地帯として開発が行われたり，瀞峡の観光船による観光地化などが進んだりする一方で，山村の過疎化も進展していった。それが文化のグローバリゼーションによって世界遺産化に至るのだが，熊野の事例では，地域社会が国家から自立してグローバルな活動を行っていることが指摘されている。

以上のように，この序章は副題において「宗教・観光・国土開発の社会学」とされた本書の方向性を示すものであり，きわめてユニークな世界遺産論であることを物語っている。

次の第1章は「神仏の＜交流＞から分離へ―修験道政策から観る＜国家と宗教＞の関係史―」と題されている。古代の律令制的ナショナリゼーションから中世の武力を基盤とするローカリゼーションへ移行することによって，地方での神仏習合が確固としたものになるが，近世の幕藩体制は限定的なナショナリゼーションにとどまるとする。

幕府は寺院諸法度によって，宗教勢力を分断して支配し，儒教は「分断と支配」を倫理化する思想であったと位置づける。宗派が林立したことによって，団結力を削がれ，ヨーロッパのキリスト教が異端審問制度によって分裂をおさえ，国王らの武力保有者に対して長期的に優位に立ったこととは対照的であるとみる。

一方で，仏教批判から排仏論が登場し，幕府も享保の改革以降は仏教保護政策を修正するに至る。立山芦峅寺において，その影響が大きかったことは既に書評で指摘した[1)]。そのような流れの中で，熊野詣は幕末には既に衰退への道を歩んでいたことが指摘される。それは民衆の宗教意識の変化により，社寺参詣が物見遊山化して，現世利益を求めるようになったからだと理由づけられる。伊勢参りは物見遊山化する一方，四国遍路や西国巡礼は信仰性が強いと述べるが，この見解には首肯しがたい。

この見解は歴史家の論文に依拠しているが，歴史地理学の研究成果として，小野寺の伊勢参りの空間的変化を分析した論文が存在する[2)]。東国からの伊勢参りは西国巡礼とセットの場合が大部分であり，近世後期になるほど，紀伊半島を巡って，一番札所から順番とおりに巡る行程は減少し，紀伊半島をショートカットして，伊勢から奈良盆地に抜ける行程が増加してくるという。確かに熊野詣は苦行であり，それを避ける行程は物見遊山化ともいえようが，かつて私見を述べたように，聖地を巡るという宗教性に大きな変化はなかったとみるべきであろう[3)]。

そして，明治維新は古代のナショナリゼーションへの回帰をめざしていたが，宗教政策は徳川幕府を継承したと指摘する。初期の過激な神仏分離政策から，明治中期には仏教がある程度に復権して，現在に至るのであるが，明治政府の宗教政策が幕府を継承したものであると断言できるか，いささかの違和感が残る。この思想史的分析は評者の手に余るものであるが，今後も議論を重ねる必要があるように思われる。

続く第2章「明治から昭和初期における熊野地方の観光対象の変遷―瀞峡と那智の滝を中心として―」は観光論となり，まずガイドブックの役割について述べられる。そこでは，JTBが実施した旅行情報収集源の調査では，ガイドブックがトップで6割強を占めたことが強調されるが，いささか古いデータかと思われ，いまやインターネット情報が主流になりつつあることを反映していない。

そして，明治期のガイドブックと大正期以降の変化が論じられ，主たる観光対象が那智の滝から

瀞峡へと変化することが指摘される。その理由を近代国家成立にともなう「科学のまなざし」によって，史跡名勝天然記念物保存法や国立公園法が，この時期に制定され，自然科学的価値に支えられた岩の造形美に注目が集まった結果であるとする。

ただ，この時期には鉄道の開通や乗合自動車が急速に普及し，ツーリズムの大衆化が進んだ時期でもあることから，熊野地方における近代交通網の整備に関する議論も必要であったのではなかろうか。この点について，出羽三山を事例に論じたことがある[4]。

第3章は「濫伐される熊野―繁栄と災害のパラドックス―」と題され，江戸時代からの林業地域であった熊野が明治維新以降のナショナリゼーションによって，官林が払い下げられ，濫伐されることにともない，水害が多発したことが指摘される。

河川の合流点の中洲に位置した熊野本宮大社も水害で高台移転を余儀なくされるが，官幣大社となっていたことから速やかに移転作業を終えたという。水害で住民の多くが北海道へ入植した十津川村は国内植民地のさきがけであったと解釈される。この国内植民地という概念は一国の先進地域と後進地域との関係へ転用されたものといい，伐採林業地帯に特化した十津川流域のみならず，熊野の全域も後進地域と化して同様に国内植民地に位置付けられるのであろう。

第4章の「電源開発と熊野の変貌」では，戦前の電源開発計画が利害関係の対立により長期化したことが指摘され，とりわけ和歌山県と三重県の対立が背後に存在したとする。

私見では，この電源開発の問題は紀州藩領の東端が和歌山県に継承されず，三重県となり，しかも県境が熊野川となったことに大きく左右されているとみられる。河川管理と開発をめぐって，両県が共同歩調をとることができなかったためにダム開発が頓挫したのではなかろうか。実際に熊野川におけるダム開発は上流部の奈良県を流れる北山川流域に，ほぼとどまっている。このあたりの空間的再編成に関する言及が必要だったのでは，と思われる。

戦前には各省庁の利水政策も競合していたのが，戦時体制下の河水統制事業によって挙国一致体制がとられ，戦後の開発にも大きく影響したとする。

そして，戦後多目的ダムの建設は建設省が担うことになって，他省庁を排除する省有化が進むことになる。たとえば，土砂の堆積にともなうダムの埋没問題は周囲の森林荒廃と密接に関連するが，林野庁とリンクすることはなく，むしろさらなるダムや砂防ダムの建設に向かい，地元業者の仕事の確保につながっているとする。

ただ，世界遺産化の実現にともない，熊野川が川の参詣道として登録されていることから，ダムの撤去や濁水問題が公的な場で議論されるようになり，グローバルな価値が持ち出されるようになったとされ，省庁縦割りのセクショナリズムが限界にきていることを示唆している。

第5章「『筏の終焉』と河川の近代化」では，前章で論じられた電源開発が，とりわけ河川を利用して木材を運んだ筏流しに，どのような影響を与えたか，についての議論が深められる。

通説では，ダム建設によって筏流しは終焉を迎えたとされるが，まずダム建設後は観光筏流しに姿を変えて継続していることが指摘される。ただし，ダムとの因果関係だけで説明されるものではないことも指摘され，さらに観光化以降には，それ以前の筏流しが「風流・名物」であったという側面が強調されるように変化したことも明らかにされる。すなわち，筏が抽象化・理念化され，実態とかけ離れたものに変容したとする。2017年の「北山村の筏流し技術」の和歌山県無形民俗文化財指定も同じ方向を有する可能性が懸念されている。

私見では，山形県の目指す「最上川の文化的景観」の世界遺産登録においても，最上川と人々の生活の多様性を改めて再確認することの重要性を喚起すべきであろう。

第6章「熊野の観光メディア言説の変動」においては，ガイドブックと旅行雑誌の記述の変化を比較して，熊野の代表的観光地が那智の滝や瀞峡のような自然景観から，熊野古道のような人文景観へと変わっていくことが指摘され，社会学の構築主義的視点の導入により，その時期の支配的な価値に共鳴した観光名所が注目されることを解明した。さらに，公的機関によるバックアップもインタラクティブな動きとして観光的価値へ影響を

与えることを指摘している。

とりわけ，文化庁の文化財保護行政の一環として開始された「歴史の道」は熊野古道の再生に結び付き，熊野のイメージを「死の国」から「聖地」へと変化させたことが明らかにされた。この「歴史の道」の施策は全国的には成功をおさめたとは言い難い面もあるが，熊野においては，地元の連携によって，大きな成果を挙げたといえよう。

第7章は世界遺産ツーリズムにおける信仰文化の価値について言及されるが，世界遺産と熊野の関わりを扱った第11章までは本書の中核を成すといえよう。副題に熊野修験の文化遺産化と観光資源化をめぐって，とあるように，まず，文化財から文化資源への変化が論じられる。端的に言えば，文化財はナショナリズム的性格を強く帯びたものであるのに対して，文化遺産は文化財の脱国家化を志向したものであるとする。

そして，世界遺産は顕著な普遍的価値を有するものと定義されているが，その意味するものは国際的な知名度よりも，多様性や固有性，個別性へとシフトしつつあると述べる。文化的景観が解釈される遺産であるとする指摘は興味深い。世界各国で文化遺産を観光資源化する地域振興の取り組みが盛んとなり，熊野を事例としての具体的な指摘が行われる。とりわけ，修験道の異端的イメージをユニークな価値あるものとして再評価する試みが行われたという。修験文化は，神道や仏教などの正当な宗教文化とは一線を画した価値を見出すことができるものなのである，とする。

私見では，出羽三山の修験道においては，熊野ほど異端的イメージは付与されてこなかったと思われる。東北地方では，修験が民間信仰の中で果たした役割が定着しており，違和感なく受け入れられていたのであり，紀伊半島とは様相を異にしたかと思われる。日本列島の各地で修験の地位については地域差が存在していたといえよう。

また，この章に付随する短いコラムとして，神仏分離・修験道廃止と世界遺産化―洞川からみる現代の民衆宗教と修験―が置かれている。洞川は世界遺産化の影響をさほど受けていないとするが，大峰山の女人禁制の問題は世界遺産登録時に大きな議論となったはずであり，女人禁制が解禁されないまま世界遺産化した現状を，どう評価するのかという点に全く言及されていないことは不可解と言わざるを得ない。

第8章「観光立国『日本』と『宗教』」においても，世界遺産と観光による地域活性化の問題が展開される。市町村の現場の担当者からの聞き取りによる分析には傾聴すべきところがある。というのは，行政と宗教との関係は政教分離の建前があることから微妙な問題が存在するわけで，それを如何に克服するかが大きな課題となる。宗教色を薄めた体験型古道歩きとして，地域の自然，歴史，文化，伝統に触れ合うことで，商品化することができたという。

ただし，世界遺産化で，全ての社寺が協力的であったわけではないといい，地域の使命として受け入れざるをえなかった面もあったとする。現場では宗教的なものを忌避するのではなく，積極的に素材として商品開発を試み，再生産が行われていると結論づける。このような動向もまた，下からのナショナリズムであるという。

普遍的な商品として再生産された宗教を消費する観光客は定型化された正当な日本の文化・歴史・伝統を内面化し，日本人としてのナショナル・アイデンティティを強化していく，とする。宗教は意図することなく，ナショナルなものへとつなぐ役割を果たすことになると指摘し，宗教がナショナリズムの道具となることを危惧している。

第9章「世界遺産とインバウンド観光」においては，田辺市の広域合併にともない，熊野古道のひとつである中辺路が行政的に田辺市に一元化されたことで，観光キャンペーンなどの取り組みが容易になり，とりわけ海外からの観光客を対象としたインバウンド観光が大きく進展した背景について分析している。

一般的に世界遺産化による観光客は登録直後には大きく増加するものの，その後は長期低落傾向にあることが指摘される。ところが，田辺市の事例では，2010年代以降に急増しており，この背景にはインバウンド観光の増加があるという。

このインバウンド観光の増加は政策的な影響もあり，日本全体にあてはまる傾向ではあるが，田辺市の場合は田辺市熊野ツーリズム・ビューローの存在が大きな役割を果たしているとする。

欧米の観光客に強い影響力を有する旅行ガイドブックのロンリー・プラネットにおいては，2010年代後半になると，熊野古道が独立した項目とし

て取り上げられていたり，田辺市熊野ツーリズム・ビューローを，日本で最も進歩的な観光組織のひとつである，と高く評価しているという。

世界遺産登録が直ちに観光資源としての価値上昇を意味するのではなく，遺産の価値を伝えるメッセージを受信者の文化的背景を踏まえて発信することが必要であると指摘する。

具体例として，日本語での情報発信とは異なり，多言語での情報発信は日本文化の基礎的情報が不可欠であることなどが強調されている。

この章の後には，日本の秘境にインバウンドを呼び込む，と題した田辺市熊野ツーリズム・ビューローの先進的取り組みを紹介するコラムが置かれており，効果的な位置づけとなっている。

第10章「問い直される世界遺産」は，2011年の台風被害を契機とした変化について述べられる。災害復旧では，どうしても文化遺産の復旧が後回しになったり，神社の聖域に一般のボランティアが入れなかったり，水害による流木などは自然現象であって国立公園として除去する必要はない，といった矛盾した見解がみられたという。

ただ，この地域は，古くから水害常襲地域であったために，いわば生活の知恵としての災害文化が存在し，それが復旧後の世界遺産に影響を与えたとする。たとえば，江戸時代に使われていた迂回路が古道ガイドに利用されたそうで，ローカルな人々による解釈の問い直しにつながったとする。それは世界遺産のナショナルな管理に対する疑義として表出したものであるという。文化遺産において，守るべき「文化」とは何か，というローカルからの問い直しであり，そのような姿勢が前述のようなインバウンド観光の発展に結び付いたといえよう。

第11章「世界遺産のインパクト」は，既存観光地と新規観光地を比較検討する試みとなっている。既存観光地の具体例としては温泉で知られる湯峯区が取り上げられ，新たな開発は規制により不可能であるものの，後継ぎ不在の宿泊施設でも後継者に引き継がれており，外部資本が入ることなく維持されているという。

一方，新規観光地の事例としては，近露・野中地区が取り上げられ，世界遺産化以降に観光業従事者が増加し，移住者による開業もみられることが指摘されている。埋もれていた地域資源が再評価され，またIターン・Uターン者が主体となって，地域おこしに積極的に関わっており，若い移住者が増えたことで，地区の小中学校も維持されている。

このように，世界遺産化は地域にとって有益なインパクトを与えていることが紹介されている。ただ，第7章から11章までの世界遺産に関わる章において，どちらかといえば成功事例ばかりを扱っており，しかも田辺市を中心とした限定的な地域を対象としていることが気にかかる。

当地の世界遺産は紀伊半島の広域的な領域を含むものであり，和歌山・奈良・三重県に広がっている。このような広域的な世界遺産化は，この時点における新たな課題となったといえることから，可能であれば，県域を越えて広がる世界遺産化について，より深く論じてほしかった。

というのは，山本恭正によれば[5]，三重県側の東紀州を通る伊勢路と称される熊野古道においては，世界遺産化反対運動が展開されており，必ずしも足並みがそろっているわけではないことが知られる。第4章で指摘したように，旧藩領が和歌山県と三重県に分断されたわだかまりが，世界遺産化にも影響したのではなかろうか。

第12章「地方移住のその先に」，および第13章「地域おこし協力隊の『仕事』」は，ともに熊野地域における地域おこし協力隊の事例を通して，地域貢献とは何か，を問いかける試みとなっている。

地域おこし協力隊として移住した方々からの聞き取り調査を通して，その役割と矛盾について，詳細な分析が行われている。その任務としては，外部からの視点による地域活性化および当該地域への定住を目指すという両立の困難なものが存在するという。

聞き取り調査からは，調査隊員にとって地元住民が求めている地域おこしの内容が把握できないことが多いそうで，むしろ今後の定住を目指して活動するほうが将来につながり，そしてそれが結局は地域おこしにもなるという。

山形県でも，地域おこし協力隊の活動が報道されているが，とりわけ県内の過疎地域は豪雪地域でもあり，大都会出身者にとって越冬することが厳しい生活とならざるをえない。定住率が高いとはいえない背景として，様々な地域環境への適応問題が存在するといえよう。

以上，本書の書評を試みたが，読後感として地域研究の重要性を再認識させられた。本書に盛り込まれた社会学の分野からの長期にわたる多面的な調査研究の貴重な成果は，地域にとっても，また文系の学問のレーゾンデートルとしても大きな意義を有するものといえよう。

なお，熊野地域における地域研究として，新宮市と東京大学文学部が提携した地域連携活動が始動している。また，田辺市は地元の和歌山大学観光学部や関西大学，追手門学院大学などとの連携を深めており，今後のフィールドワークを通した地域活性化が大いに期待される。

（岩鼻通明）

〔注〕

1）岩鼻通明「米原寛著『立山信仰研究の諸論点』」山岳修験67，2021，96-97頁。

2）小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合」筑波大学人文地理学研究14，1990，231-255頁。

3）岩鼻通明「旅日記にみる出羽三山」『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院，2003，133-193頁。

4）岩鼻通明「「三山登山案内」本道寺で創られた鳥観図」『絵図と映像にみる山岳信仰』海青社，2019，65-74頁。

5）山本恭正「世界遺産「熊野古道」における「文化」概念の再検討：文化的景観「信仰の山」をめぐる理念と実践」白山人類学13，2010，93-115頁。